

大学史ニュース

第26号

令和6年2月29日 発行

目次	
◇学祖山田顕義と加藤ひな、そして相馬御風…………… 2	◇資料紹介 月刊誌『創造日本』…………… 5
◇箱根から戦場へ…………… 3	◇自由形短距離の名選手・濱口喜博…………… 6
◇太平洋戦争初の戦没者…………… 4	◇第49回全史料協全国（東京）大会…………… 7



「雲客観兵式之図」——山田顕義生誕180年

今年、令和6（2024）年は、日本大学学祖・山田顕義が生誕して180年にあたります。

弘化元（1844）年に長州藩士山田顕行の長男として生まれた山田顕義は、幼いころは吉田松陰の松下村塾で学び、のちに軍人としての能力を開花させ、戊辰戦争等で活躍しました。

山田の事績の一つに、近代陸軍創設への寄与があります。日本で近代的な軍隊が整えられていく中で始まったのが、本図に描かれた「観兵式」です。

本図「雲客観兵式之図」は、明治20（1887）年に浮世絵師の瀬尾文治郎（歌川国保）によって描かれました。作成年と図中の建物の様子から、日比谷練兵場（現在の日比谷公園）で行われた際のものであることがわかります。

「雲客」とは、いわゆる殿上人を指します。図の中央よりやや右に描かれているのが明治天皇で、上部には当時の参謀本部長有栖川宮熾仁親王と大臣たちが描かれました。絵の上部に描かれた人物のうち右から三番目が、当時司法大臣を務め、陸軍中將でもあった山田顕義です。

近代陸軍の創設に関わった山田の目に、観兵式に臨む陸軍の姿はどのように映ったのでしょうか。

（上野平）

学祖山田顕義と加藤ひな、そして相馬御風 一小唄「風折烏帽子」雑記一

風折烏帽子 腰蓑着けて 清き心の長良川 流れ尽きせぬ 幾千代かけて
君に捧げん 鮎の魚 船端叩いて ホッホッホッ

明治23年（1890）9月7日、岐阜県長良川で鵜飼見物をした山田顕義は、上記の「風折烏帽子」という詩をつくりました。傍にいた加藤ひなが即興で節をつけたというこの小唄は、現在でも鵜飼の季節となると、岐阜の宴席で謡い継がれています。

岐阜長良川の鵜飼は、古代より行われていた伝統ある漁法で、江戸期には尾張藩が保護していましたが、廃藩置県により鵜匠制度が廃止されてしまいます。岐阜県は鵜飼の伝統を継承していくため政府に陳情し、明治23年、長良川に3ヶ所の御猟場が設置され、鵜匠は宮内省主猟局（現在は宮内庁式部職）に所属することとなりました。長良川に御猟場が設置された同じ年に、顕義が小唄「風折烏帽子」を作ったというのは、単なる鵜飼見物というより、何か意味がある視察だったのかもしれませんが。

それでは、この「風折烏帽子」小唄に関わった加藤ひなを紹介します。安政4年（1857）、神田（浅草とも）の職人の娘として生まれたひなは、子供のころから芸事を仕込まれました。ある年の春、吉原の夜桜見物で芸者の姿を見たひなは、芸者になることを決意します。ひなの清元節は仲間内でも有名となり、その後、山田顕義に見いだされ、日本橋中洲に辰巳屋というお茶屋を開きました。

明治23年9月、山田顕義の長良川鵜飼見物に同行し、顕義が詠んだ詩に即興で節付けしたと伝えられています。山田顕義死去後の明治27年には、葛飾区の浄光寺に風折烏帽子碑を建立しました。この碑の横には「空齋山田伯遣墨碑建設者」の碑があり、発起者として「巽家（辰巳屋）ひな」、上段には、ひなに佐佐木信綱を紹介したという冷灰（江木衷）、山田顕義と同郷の医師で、顕義死去の際に没後診断を行った殿山（山根正次）などの号が記されています。また、建碑式当日の役割も記されており、演説を三遊亭圓朝が担当し、風折烏帽子の振り付けを花柳芳次郎、吟じたのが清元お葉と当代一流の面々が参加しています。

その後、ひなはクリスチャンとなり、英語を学ぶとともに、佐佐木信綱から短歌を学びました。明治41年、川上貞奴が所長の帝国女優養成所の副所長に就任し、翌年には演劇視察のため渡米しますが、ボストン滞在中のホテルでガス中毒のため死去しました。ひなの死を惜んだ関係者は、短歌の師である佐佐木信綱が撰文、福澤桃介が首唱者となり、明治44年に風折烏帽子碑がある浄光寺に加藤ひなの碑を建立しました。



加藤ひな（『名士と名妓 明治史の裏面』より）

加藤ひなと同じく、佐佐木信綱の竹柏会で歌を詠んだのが、詩人・歌人の相馬御風です。御風は昭和4年5月に制定された現在の日本大学校歌を作詞した人物です。御風は明治39年に早稲田大学英文科を卒業し、「早稲田文学」社員となる一方、約1年間、成美女学校で講師をつとめます（相馬文子「相馬御風と目白台」）。成美女学校は九段下にあった英語専門の女学校で、御風が講師の当時、生徒には平塚らいてふ、山川菊栄がいました。相馬御風の随筆「雪國だより」によると、彼女ら生徒の中に交じり、御風の母と同年齢の加藤ひなが英語を学んでいました。ひなは、教師である御風に対して、早く結婚するように諭したり、ひそかに日本酒を手渡したりしたそうで、そのさばけ方を御風は好ましく見ていたといえます。ひなの学習振りは凄まじく、アメリカに行きたい一心から真剣に毎日英語を勉強し続け、ついに全課程を修了しました。前述の加藤ひなの碑には「成美会会員一同」と刻まれています。恐らく共に成美女学校で英語を学んだ学生たちを指すのでしょう。

短歌の師である佐佐木信綱は、加藤ひなのことを「生粋の江戸児というのはこんな人か」と思ったそうで、数多い弟子の中でも、ひなはとくに変わった弟子だった

と記しています。また、長谷川時雨は『美人伝』の中で、「バイブルに親しんで、聖徒となった中年の加藤雛子は、ハイカラな、話上手な、交際にたけた、気のおけぬ婦人」で、「今でいうよい意味の新しい女」だったと記します。このように加藤ひなの江戸っ子気質、飽くなき探求心は、当時の文化人たちに深い印象を残しました。

(松原)

【参考文献】

- 小野崎隆賢『岐阜の座敷唄 かざをりゑぼし』(NPO法人花の会、平成26年)
- 佐々木信綱、佐々木雪子『筆のまにまに』(人文書院、昭和10年)
- 相馬御風『相馬御風随筆全集第七巻 砂上点描』(厚生閣、昭和11年)
- 相馬文子「相馬御風と目白台(1)」(文京区立目白台図書館館報通巻11号、昭和62年)
- 長谷川時雨『美人伝』(叢書『青踏』の女たち第9巻、不二出版、昭和61年)
- 『長良川鶴飼再発見』(岐阜市・岐阜市教育委員会、平成26年)

箱根から戦場へ 一駅伝4連覇に貢献した鈴木勇一



襷を渡す鈴木勇

本年1月、箱根駅伝は第100回大会を迎えましたが、戦前・戦中に箱根路を走った多くの学徒の中には、後に、戦場に身を置くことになった者たちもいました。昨年6月、その一人、鈴木勇(昭和11年専門部商科・14年商経学部商業学科卒)の関係資料調査のため、勇の長女渡辺暁子氏のお宅を訪れました。

この調査は、令和3(2021)年に当時課員だった小松修が中川壽之氏(当時中央大学大学史資料課勤務)からの情報提供に基づいて計画したものでした。しかし、新型コロナウイルス蔓延のため中止され、2年越しに実施の運びとなり、退職した小松にも同行して頂きました。

鈴木勇は、昭和9(1934)年の箱根駅伝第15回大会から第20回大会まで、在学中の6年間連続出場し、その間4回区間賞を受賞し、第16回大会からの日本大学4連覇に貢献しました。昭和11年の日本陸上競技選手権第23回大会では、マラソンで優勝しています。

卒業後就職しましたが、昭和16年10月召集されて入営、船舶工兵(通称：暁部隊)に配属されました。そのため、17年に生まれた長女に暁子と名付けたとのことです。

鈴木は、ボルネオ・シンガポール・フィリピンを転戦。輸送船で移動中爆撃を受けて海に投げ出された際、近くで爆弾が破裂し、その影響で片耳

が難聴となりました。フィリピンではマラリアに罹患し、野戦病院に入院していたため、その後の戦闘に加われず生き残ったとのことですが、マラリアの後遺症は晩年まで続きました。

戦後は、郷里の山形で選手育成につとめ、昭和39年の東京オリンピックで200メートル競走に出場した、山形県立高島高校の伊澤まき子氏らを指導しました。箱根駅伝については家族に語ることはなく、没後にメダルをみつけて、その活躍を知ったとのこと。

調査では、駅伝関係アルバム1冊の他、陸軍時代の写真など4点、箱根駅伝のメダル4点を撮影させていただきました。今回その中から写真2点とメダル1点を掲載しました。記して御礼を申し上げます。

(高橋)



昭和16年、入営時の軍装姿



第18回大会(昭和12年)参加章

太平洋戦争初の戦没者

本年、当課では『日本大学新聞』に掲載された出征関係記事資料集の刊行を予定していますが、掲載資料の一つに「工科柔道部の中野君 捨身の技で自爆す 大東亜戦で初の犠牲」（『日本大学新聞』第375号3面、昭和17年2月10日付）と、見出しのついた記事があります。

内容は、中野梅吉（昭和15年3月専門部工科卒・工学部在学中）が、日米開戦当初、爆撃機機長として〇〇（伏せ字）方面に出撃し16年12月12日に名誉の戦死を遂げたとの記事で、当時日本大学工科参事と同柔道部師範であった古田重二良（後の会頭）からの人物談も掲載されています。

昨年10月、中野の妹の孫（姪孫）にあたる乗田綾子氏から、祖母の願いで在学中の情報を知りたいとの問い合わせがありました。『日本大学新聞』の記事を調べたところ、工科柔道部に所属し1年生の時から注目され、2年生では全国高工柔道大会（団体戦）で優勝、3年生では副将を務めていたことなどが分かりました。



工科柔道部優勝に際して
（昭和13年）



海軍予備学生作業服（昭和15年頃）
後列左から3人目が中野

さらに、新聞記事では簡単に紹介されていた海軍時代の経歴を調べると、海軍飛行科予備学生第7期生であることが分かりました。第7期生の採用者33名のうち日本大学出身者は2名、その一人が中野梅吉でした。飛行科予備学生は高等教育機関出身者に1年間士官搭乗員としての教育を施し、修了後予備少尉に任官する制度で、昭和9年に開始されました。当初、任官後は予備役となり一般社会で生活を送っていましたが、「日中戦争」が長引くと、次第に、予備役編入後同日召集となり、実戦部隊に配属されるようになっていきます。

軍航空隊に配属となり、「太平洋戦争」開戦直後に開始された、北太平洋の作戦上の拠点ウエーキ島攻略作戦に航空部隊として参加し、同年12月12日戦死しました。

学歴は、海軍関係の文献では「日本大学専門部工科卒」となっているのみですが、『日本大学新聞』から工科での専攻は機械科で、工学部に進学し在学のまま海軍に籍を置いていたことが判明しました。

乗田綾子氏からは、所蔵している写真8点と戦没後に届いた海軍飛行科予備学生同期生からののがきの画像をご提供いただき、今回その中から写真3点を掲載しました。記して御礼申し上げます。（高橋）

【参考文献】

小池猪一編『海軍予備学生・予備生徒』第1巻（国書刊行会、昭和61年3月刊）

碓義朗『海軍航空予備学生—予備士官パイロットの生と死—』（光人社、平成12年12月刊）



海軍予備少尉正装での家族写真
（昭和16年頃）

資料紹介 月刊誌『創造日本』



『創造日本 創刊号』
(昭和2年4月発行)



『創造日本 第一巻第三号』
(昭和2年6月発行)



『創造日本 第二巻第十号』
(昭和3年10月発行)

『創造日本』は、昭和2（1927）年4月1日に創刊された雑誌です。当課では、創刊号・第一巻第三号・第二巻第十号の計3点を所蔵しています。

本雑誌は表紙などを見る限り「日本大学」といった表記はなく、「大学と関係があるのか？」と疑問に思うかもしれません。しかし、出版元である創造日本社は、総裁を平沼騏一郎（当時日本大学総長）が、会長を山岡萬之助（当時学長、のちの第3代総長）が務め、理事や編集顧問も、額田豊（医学科長）や渡邊徹（予科長）をはじめとした本学関係者によって組織されていました。また、同社の所在地についてですが、「創造日本社規則」の第2条には「本社ノ事務所ハ日本大学出版部内ニ置ク」とあります。日本大学出版部は、校外教育として『法律科講義録』等の講義録を発行していた大学の一機関です。出版部同様、『創造日本』の発行所「東京市神田区三崎町三ノ一」は日本大学三崎町校舎の住所であり、「日本大学」という名を冠していなくとも、本学と深い関係にある雑誌だといえるでしょう。

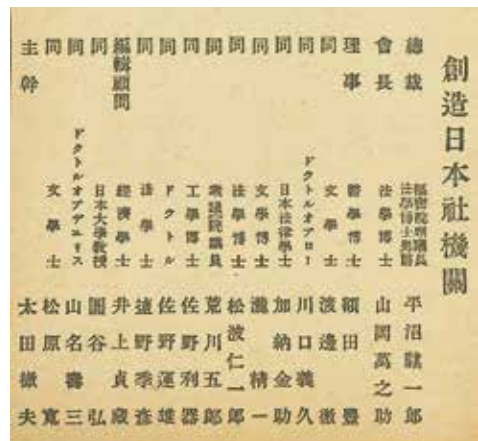
その発行目的はというと、「大学教育の民衆化」でした。各号の巻頭に掲載されている「宣言」には——明治以来、国は飛躍的に発展したが、その基礎となったものは西欧文物の模倣であった。昭和へと年号が変わった今、更なる躍進のために新たな日本文化を「創造」することが求められている。それらの達成には、一般民衆の教化が重要だと考え、創造日本社は月刊誌『創造日本』を通して、大学教育を一般に開放する——といった旨が記されています。本雑誌の内容を見てみると、以上の目的に沿って、法律、政治、哲学、経済、社会、文芸、自然科学、衛生、国防といった各分野の有識者による論説や講座の他、小説・戯曲及び詩・短歌・俳句の懸賞作品、法律・衛生の相談、「読者たより」といった読者投稿などが掲載されていることが分かります。

なお、販売場所は巻末に「全国の各書店」と記されています。創刊号と第一巻第三号は10銭、第二巻第十号は15銭（当時、コーヒー1杯約15銭）で販売されました。

(図子)



『日本大学新聞』第一〇〇号掲載
の広告（昭和2年9月20日付）



『創造日本 創刊号』掲載の「創造日本社機関」

自由形短距離の名選手・濱口喜博

本学出身の水泳選手・濱口喜博は、大正15（1926）年に香川県香川郡雌雄島村の男木島（現在の高松市）に生まれました。男木尋常小学校卒業後に香川県立大川中学校に入学し、この頃から水泳で活躍していました。おりしも太平洋戦争のただ中ということもあり、松山海軍航空隊に海軍飛行予科練習生として入隊、その後終戦を迎えます。

濱口の転機となったのは、昭和21年に開かれた四国対抗での遊佐正憲（日大卒・五輪メダリスト）と宮本茂（早稲田大卒）との出会いです。ふたりの泳ぐ姿を見て刺激を受け、さらに大学進学への勧誘を受けた濱口は上京を決意し、同年6月、日本大学専門部農業経済科に入学しました。ここから濱口の快進撃が始まります。



碑文谷の日大プールでの集合写真
左から2番目が濱口喜博（濱口家所蔵）

として選ばれ、各地で模範演技を披露したほか、南米の日本人移民らと交流するなど、スポーツを通じた国際親善に尽力しました。

昭和26年に日本大学を卒業した後は日本鋼管に所属して競技を続け、短距離のトップアスリートとして活躍します。そして、昭和27年、日本にとって戦後初のオリンピックとなるヘルシンキ大会代表に選出された濱口は、100m自由形と800mリレーに出場しました。100mでは、準決勝再レースに破れて惜しくも決勝進出とはなりませんでした。その後の800mリレーで銀メダルを獲得し（メンバーは濱口のほか鈴木弘、谷川禎次郎、後藤暢。鈴木と谷川は日大、後藤は浮羽高）、さらに日本記録を樹立します。濱口は同大会の閉会式において、日本代表の旗手を務めました。

その後、日本鋼管を退職した濱口は、競技を引退して大映所属の俳優に転じました。濱口のデビュー作は“和製ター



大川中学校時代 昭和16年
後列左から2番目が濱口喜博（濱口家所蔵）

昭和22年の日本選手権では200m自由形で1位を獲得、同年の日本学生選手権（インカレ）でも同競技で1位、100m自由形で3位、800mリレーでは古橋廣之進・橋爪四郎・真木昌と共に1位を獲得します。翌年の日本選手権・インカレでも活躍し、優秀な成績をおさめました。そして、昭和24年の日本選手権で自由形の100mと200mで1位を獲得した濱口は全米水上選手権出場選手に抜擢され、日本人として戦後初の国際大会に出場するため、古橋・橋爪らと共に渡米することが決まりました。

全米水上選手権では、得意の200m自由形で優勝し、さらに800mリレーでは古橋らと共に当時の世界新記録を叩き出し、アメリカの人々を驚かせました。その後のハワイ国際水上競技大会では100mと200mの自由形で二冠を達成しています。濱口は翌25年の南米遠征にも日本代表選手の4人のうちのひとり



ヘルシンキオリンピック出発前の記念写真 昭和27年
（濱口家所蔵）

ザン”として制作された「ブルーバ」(昭和30年10月公開)で、水泳で鍛えた肉体美を以て主演に抜擢されました。主に映画俳優として活躍しましたが、「新・少年ジェット」などのテレビ番組にも出演しています。

濱口は競技引退後も俳優業の傍らで日本大学水泳部及び日本の水泳界を支え続け、昭和40年から47年まで本学水泳部監督を務めました。日本水泳選手団の代表監督もたびたび務め、数多くの選手を導きました。昭和59(1984)年のロサンゼルスオリンピックでは水泳の日本代表監督として選手陣を率いています。

同世代の古橋や橋爪らとは晩年まで友情が続き、日本大学時代から卒業後まで、生涯にわたって日本の水泳界を共に盛り上げました。選手・俳優・指導者として多方面で活躍した濱口は、平成23年に85歳でこの世を去りました。

この度、本稿を執筆するにあたり、濱口喜博氏ご令息の敦博様には貴重な資料を調査させていただきました。ここに記して御礼申し上げます。

(上野平)



後進の指導に当たる濱口喜博 昭和39年
(濱口家所蔵)

第49回全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国(東京)大会



駒澤大学禅文化歴史博物館

令和5(2023)年11月30日・12月1日、第49回全史料協全国(東京)大会が駒澤大学駒沢キャンパスで開催されました。対面とオンラインのハイブリッド形式で行われ、対面での実施は4年ぶりとなりました。

初日午前中の研修(施設視察)は、4か所から選ぶ形になっており、筆者は駒澤大学禅文化歴史博物館を見学しました。同館では禅文化の歴史をはじめ、大学史や博物館実習生による企画展など多彩な展示が行われていました。また、午後は駒澤大学とともに共催した昭和女子大学の関係者による、研修会及び特別講演会が行われました。

2日目は、独立行政法人国立公文書館の中野佳氏による準認証アーキビストについての特別報告の後、大会テーマ研究会が行われました。今年度の大会テーマは「自治体アーカイブズの現在と未来」で、東京都公文書館、尼崎市歴史博物館・あまがさきアーカイブズ、鳥取県立公文書館における事例報告が行われました。その後の総合討論では、資料の電子化や電子データで作成された資料をどのように収集・保存・管理していくかという話題が印象深く、当課の業務でも考えていかなければならない問題であると改めて感じました。



全体討論の様子

(図子)

